

## 岩手県に生育する桐の種類

特用林産部長 八重樫 良 暉

### 要 旨

桐は植物分類上ゴマノハクサ科の桐属に位置づけられ、その種類としてニホン桐・チョウセン桐などがあるとされているが、種類の判別が不明瞭であったことから、本県に生育する桐についてその実態を調査したものである。

- 1 桐は東亜原産でその種類として、8種類が確認される。
- 2 わが国に分布する桐の種類は、ニホン桐・チョウセン桐・ウスバ桐・及び、ラクダ桐であるが、ウスバ桐は東北地方では生育できない。
- 3 桐の種類別識別は成木の花冠形態で可態であるが、開花期以外あるいは苗木・幼齢時においては樹形果などの総合的な見方が必要である。
- 4 岩手県内で桐の主産地といわれる地方で最も多く分布するのはニホン桐で、いわゆる南部桐の主体をなしている。
- 5 チョウセン桐の分布は全県的に少なくラクダ桐は県南部に多く分布する。
- 6 桐の種類によって、工芸的利用面で材質に相異があり、桐の植栽に当たっては系統の明らかな苗木を用いる必要がある。

### 1 はじめに

桐は、植物分類上、ゴマノハクサ科の桐属に位置づけられている。今まで多くの参考書等<sup>1)~4)</sup>には、わが国に分布する桐属の種類として、桐(ニホン桐)、台湾桐、ココノエ桐、チョウセン桐、ラクダ桐、及び、中国種との交配種などがあるとされていたが、岩手県に生育する桐の種類は何れなのかという疑問があった。

また、本県で生産される桐材は南部桐と呼称され、福島県会津地方産の会津桐とともに古くからその生産量も多く全国的に有名である。これは本県の桐材産地の大部分は、旧南部領地であったからとも考えられていた。しかし、東京のタンス専門店では南部桐と会津桐では、材色の変化に相異があり、両材で同時に作られたタンスで紫黒色化するのは南部桐が1年程度で早く、会津桐は2年程度で遅いということや、長らく両材を取扱っていた下駄製造業者は、両者に明かな材質的な差異が見られるということもあって、これらの相異は生育環境の違いもあるだろうが、桐の種類によるものではないかと考えられたので、その実態を調査することにした。

表-1 桐の種類とその発表文献

文献名 発表年度 発表者名	和名	ココノエ桐	—	ニホン桐	—	—
	中国名	泡桐	紫桐	日本泡桐	興山桐	川桐
	学名	<i>Paulownia fortunei</i>	<i>P. duclouxii</i>	<i>P. tomentosa</i>	<i>P. recurva</i>	<i>P. fagesii</i>
水原高等農林学校報告 1925 植木 秀幹		○		○		○
中国樹木分類学 1958 陳 嶸		○	○	○	○	○
台湾木本植物図誌 1962 劉 榮 瑞		○				
泡桐属総論 1961 胡 秀 英		○		○		○
中国科学院報告 1974 熊倉 国雄		2種に分類 ○ ○		○		
泡桐属的新種 1975 胡大維ほか		○				

この調査に当たって、既往の文献及び県内外の実態を知る必要があり、多くの方々から資料の提供を戴いたが、中でも国立林業試験場造林部 飯塚三男氏、新潟県立新発田農林高等学校教官 熊倉国雄氏には資料収集に特段の御配慮を戴いたことを特記して感謝を申し上げる。

## 2 桐の種類

桐は、東亜の原産とされており、わが国では自生しなかったとするのが植物学上の定説である。したがって桐属の多くの種類は中国大陸に分布し、桐についての研究者、胡秀英女史（台湾省出身在米）の著「泡桐属総論」によると、桐の種類は文献上で集録されるものは20種にも及ぶが同名異種・異名同種があるとしている。そこで、同書を含めて主な過去の桐の種類について発表されている文献等からその種類を集録すると表-1のようになる。

この中で、2つ以上の文献に取り上げられている種類と、1975年に台湾省林業試験所、胡大維・張景珠氏によって新種として発表されたウスバ桐（*Paulownia taiwaniana*）を加えると8種類となる。

この中でわが国に分布し、生育が確認されるものに、ニホン桐・チョウセン桐・ウスバ桐の3種であるが、これらの種類と形態を異にし、桐材業者間でラクダ桐と呼称しているものがあるので4種類と想定される。

ラクダ桐の形態については後述するが、種類の分類記載で最も多い「中国樹木分類学<sup>5)</sup>」における内容記載から見ても、本種に該当する種類が見当たらないことから、現在は種類として一般的に確認されておらず、学名も不明である。

なお、ウスバ桐については、熊倉氏の調査報告<sup>7)</sup>によると、以前からわが国にも導入されており、

表-1 つづき

タイワン桐	—	—	チョウセン桐	—	ウスバ桐
白 桐	光 桐	コウ桐	—	蘭光桐	薄葉桐
P. kawakami	P. glabrata	P. rehderiana	P. coreana	P. elongata	P. taiwaniana
	○		○		
○	○	○			
○					
○	○		○	○	
○	○			○	
○					○

最近まで、タイワン桐、あるいは、ココノエ桐と称されていたものが殆んどこのウスバ桐であることが判明した。すなわち、わが国にはタイワン桐、ココノエ桐は生育しておらず、ウスバ桐は九州・四国・関西方面に広く分布し、その北限はおよそ茨城県と新潟県を結ぶ地域以南と想定されている。

このようなことから、わが国に分布する4種類の桐についてその呼称など今までに紹介されて来た経緯は次のとおりである。

(1) ニホン桐

本種は、1781年にスウェーデンの植物学者、チュンペリー ( Carl Peter Thunberg ) が長崎県で標本を採集し、ビクノーニア・トメントサ ( *Bignonia tomentosa* ) と命名発表したもので、その後幾多の学名変更があった後、1844年にドイツ人、シーボルト ( Philipp Franz von Siebold ) 及びツツカリニ ( Joseph Gerhard Zuccarini ) の両氏によってパウロニア・トメントサ ( *Paulownia tomentosa* ) となったもので和名キリ・ニホン桐のことである。

この植物学的形態は、シーボルト・ツツカリニ共著の「日本植物誌」に花・蒴果・種子等の図版と共に詳述されており、わが国では広く分布する種類である。

(2) チョウセン桐

本種の最初の発表は、1925年に当時の朝鮮における桐の種類について、水原高等農林学校報告第1号に、植木秀幹がニホン桐と比較して別種のものであることから、チョウセン桐 ( *Paulownia Coreana Ueki* ) として発表したもので、花・葉などの図版を添えて説明している。

その後の文献では、「桐属総論<sup>6)</sup>」に本種はニホン桐の亜種として位置づけている。なお、「中国樹木分類学<sup>5)</sup>」にはニホン桐の亜種に、黄毛桐 ( *P. tomentosa* var. *Lanata* )、白花桐 ( *P. tomentosa* )

var Pallide )の2種があるとしているが、記述の詳細がなく本種がこれらに該当するのか不明である。

熊倉氏の調査<sup>7)</sup>によると、古くからの桐材産地には申し合わせたように、ニホン桐と共に分布し、例えば福島県、埼玉県、長野県、京都府、奈良県、鳥取県などに広く分布するとしている。

チヨウセン桐という名称は、朝鮮原産ということではなく、学名に基因するものである。

### (3) ラクダ桐

本種の文献的な初見は、1933年大日本山林会誌(611号)に掲載されてある座談会記事である。その中に大正5・6年頃からラクダ桐が出廻り、材質が劣り価格も安いということがある。

その後昭和10年4月に開催された全国桐苗木品評会において、出品点数235点のうち20%のラクダ桐が含まれていた記録もある。

大正年間に発行されている北川<sup>2)</sup>・緑川<sup>3)</sup>・木暮<sup>4)</sup>の著書にはラクダ桐の呼称はなく、緑川は中国桐と日本桐の交雑種があるとしているが、これはおそらくラクダ桐のことを指していると思われる。

ラクダというのは動物の駱駝に起因するが桐以外に、ラクダ炭・ラクダ蠟燭・ラクダ芋などのように使われており、通常的なものよりも何れかの点で下等なもの、質の劣るものに付けられていることから、桐材として他の種類に比して生長が良く、年輪幅の広い材で材質が他の桐に較べ軟かく劣ることからラクダ桐と呼称されたものと考えられる。

### (4) ウスバ桐

本種は、前述のように本県には生育しないが、1975年に新種として発表される以前は、台湾桐(台湾産の桐ということを含めて)あるいは、ココノエ桐などと誤称されていた。

また、生長が速いことで東北地方でも宣伝されたこともあった。当场で、1958年頃、六原試験地において植栽したところ冬期間に当年伸長の幹部は枯れるが、根部は生存し、毎年萌芽はするが5～6年で消滅したことがあった。

ウスバ桐という和名は台湾において古くから一見してココノエ桐に類似しているが葉が薄いことから薄葉桐と呼称されていたことに起因している。

## 3 桐の種類の見分け

県内に生育する前述の3種類の桐の見分けについて、最も特徴のあるのは花冠の形態である。これを図化すると図-1のようになり、内部の線あるいは点線の数、あるいはこれらを欠くという相異がある。

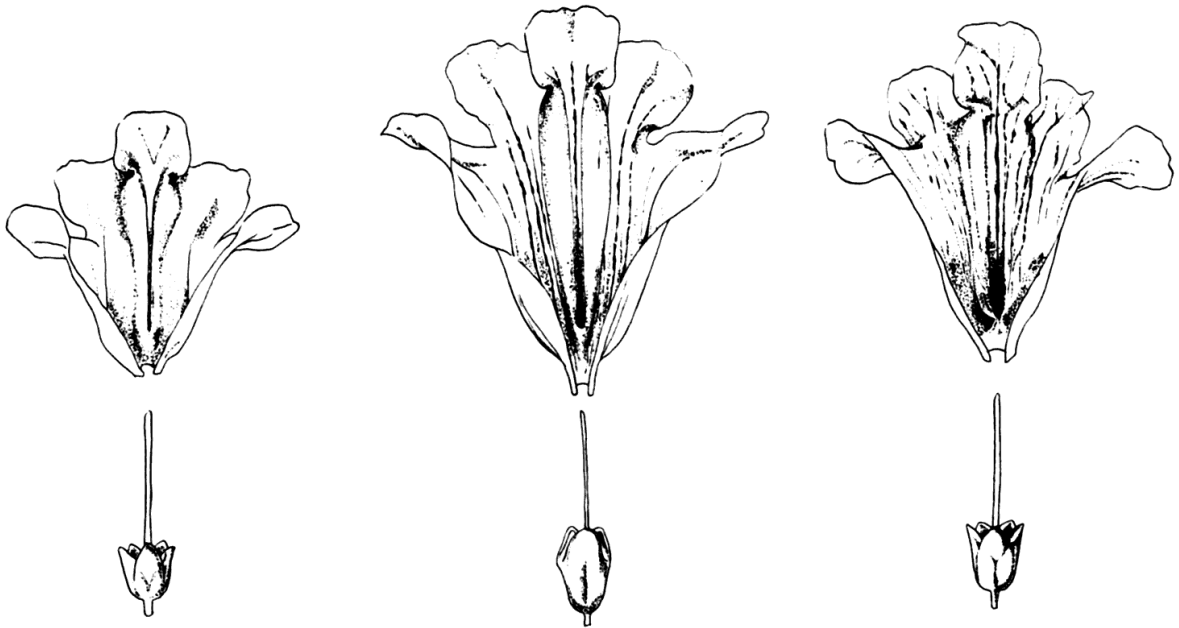
その他の形態について、当场六原試験地に植栽し、花を着けている成木の観察によってそれぞれの特徴を表-2に示したが、生育環境あるいは、樹勢等によって多少の変化が見られ、開花期以外における見分けに当たっては総合的な判断を必要とする。

苗木時代の見分けは、岩泉町で桐の実生育苗を実施している佐々木寿登氏の観察を参考とした。

チョウセン桐  
(*Paulownia Coreana*)

ラクダ桐  
(不明)

ニホン桐  
(*Paulownia tomentosa*)



図一 1 チョウセン桐・ラクダ桐・ニホン桐の花冠展開図

材質の相異は、北上市で桐材の彫刻、面の作成をしている八重樫寛氏の経験を記した。

桐の生長は植栽地の立地条件によって支配されることが多く、種類による相異はラクダ桐は他2種に比して一般的に優勢である。

#### 4 岩手県における桐の種類別分布

現在、桐の種類区分は花冠の形態によって可能であり、開花期に一斉に調査することで成木の種類別分布を知ることができる。

桐の成木の多い、岩泉町、新里村を対象に調査した結果は殆んどがニホン桐であり、チョウセン桐・ラクダ桐は非常に少なかった。

このような地域では、地元産の桐種根によって苗木生産が長年行われてきているので、同一種のものが、増殖されていることを示すものである。

桐材業者は、ニホン桐とチョウセン桐の両者は材質の面で区別し難いので、いずれも地桐と称しているが、ラクダ桐は、これらと違い材質を異にし、価格評価に差をつけて取引している習慣がある。

したがって、桐材業者から、その地域において取扱う桐材に占めるラクダ桐材の混入割合を聞き取ることによって、地域のラクダ桐の分布を知ることができる。

表-2 ニホン桐・チョウセン桐・ラクダ桐の識別

区 分		ニホン桐	チョウセン桐	ラクダ桐
苗木	幹 型	根元が太く、タケノコ状、芽の間隔は上部ほど狭くなる。	ニホン桐に類似	同大で円筒状、芽の間隔は等間隔
	樹皮 皮目 葉	白っぽい感じ 円型、突出。 斜上 厚く毛が密	緑色が強い 円型、小粒 斜上 固い感じ、毛は短い	黒っぽい感じ 紡鐘型、平面的 下垂 薄い感じ、毛は少ない
成木	樹 型	横楕円型（カクテルグラス型）	円型（ブランデーグラス型）	鐘型（サワーグラス型）
	枝条皮 樹皮 葉	鹿の角型 滑らか 斜上し、葉ウラが見える。	密、小弧状 堅く緊密 ニホン桐に類似	大きな紡垂型 あらく、き裂が深い 小型で下垂する。
	花 序	長く花が多い	長く花が多い	短かく花が少ない
花	大きさ 花冠内 の紋様	6cm内外 紫線及び点線が16本内外、線の先端は花卉の端まで及ぶ	6cm内外 紋様なし	7.5cm内外 紫線及び点線が10本内外、線の先端は花卉の内側で止る
	ガク			5ヶのうち1個は幅広く純頂となる
種実	朔 果	球形に近く、やや上向き 3.5cm×2.8cm	鈴形で小型 3.5cm×2.5cm	長卵形で紡鐘型、下向き 4.6cm×3.5cm
	胚 座	円型・黒色・小型で薄い	長楕円型・黄褐色・厚い 大きさ不揃い	細長・灰褐色・従溝深く厚い
材質	固 さ	固くノミ離れが良好	ニホン桐に次ぐ	柔らかくノミ離れ不良
	入 色 皮 沢	少ない 1年経過で紫黒色に変色	少ない 白い感じ、2年経過で紫黒色に変色	多い 黄色の感じ、年輪に沿って黒色に変色
その他	生 長	—	—	ニホン桐・チョウセン桐に比し生長量が大きい
	寿 命	長い	長く老木が多い	短かく20年で心材に腐れを生ずる

すなわち、前記の岩泉町、新里村のラクダ桐は10%以内、宮古市・久慈市・二戸市等では20%程度といわれている。

県南部の大船渡市・一関市・北上市では50%以上という。

大船渡市で大正時代から桐材を取り扱っている業者は、昭和初期はラクダ桐は20%程度であったが第二次大戦後は50%となり、最近では70%となっているという例もあって、苗木購入、あるいは苗木生産に当たって容易に入手・生産できるものを植栽した結果と考えられる。

比較的ラクダ桐の少ない久慈市地方でも、部落によっては殆んどラクダ桐のみというところも見られる。これは戦後に入植した開拓地などであるが、苗木の購入先によって分布が異なっている例である。

チョウセン桐の分布は、ラクダ桐の多い地方に混入割合が高くなる傾向が見られる。これは、過去に苗木の導入が頻繁に行われていたことを意味するのではなかろうか。

本県の古くからの桐材産地にニホン桐の分布の多いことは、福島県会津地方において大径木のいわゆる銘木級の木にチョウセン桐が多いということと対称的であり、このようなことが、南部桐と会津桐の材質的な相異と考えられる。

## 5 むすび

桐の植栽は材の収穫に目的があり、桐の種類によって材質的な相異がある。それは多分に手作り家具などに見られる工芸的な材質であるが、木目の均一で通直なものが貴重視されており、中には生長が早く木目の荒いラクダ桐は使わないという向きもある。

今までの桐植栽は、一般用材よりも生長が良く、換金も早いという利点から種類に関係なく増殖されて来たことは否定できない。

また、桐材の用途は主に家具用材に仕向けられるが、利用の方法として、表面だけが木目の揃ったスライス板の貼り合わせで使われる傾向が多く、同じ桐材でも、表面の装飾的に使われるものと、その芯となる材に区分される。

いづれにしても桐の育成目標は大径通直材生産に指向されるが、木目が通直に通り年輪幅の均一に育つのは、比較的寒地に生育するニホン桐・チョウセン桐で、その価値も高く評価されている。

現在わが国の桐材需要の90%は、中国・台湾・アメリカ等からの輸入材に依存しているが、アメリカ材を除く桐材は、種類としては暖地産で生長が早く、木目が荒く工芸的な材質の価値は劣るため、良質のニホン桐・チョウセン桐とは利用面での競合は少ないものと考えられ、今後の桐植栽に当たっては、種類の明らかな系統の苗木を用いる必要がある。

## 6 引用文献

- 1) 桐の栽培法, 東洋館出版社, (1972). 熊倉国雄
- 2) 桐の造林法, 三浦書店, (1922). 北川 魏

- 3) 櫟・竹・桐・杞柳の実際経営学, 三浦書店, (1926). 緑川 緑
- 4) 桐栽培の利益と材の利用, 三光堂書店, (1925). 木暮藤一郎
- 5) 中国樹木分類学, 科学技術出版社, (1958). 陳 嶸
- 6) 泡桐属総論, 台湾省立博物館, (1961). 胡秀英
- 7) 林業技術 **409** P42~45 (1976). 熊倉国雄: 日本・南米の現生樹「ココノエギリ」は「タイワンウスバギリ」である。